

1 背景とねらい

本県におけるイネミズゾウムシの発生は、昭和57年水沢市で初発生が確認されて以来、年々分布を拡大し、昭和62年には、ほぼ県下全域に分布を拡大した。そこで、本県における発生様相及び被害状況、防除対策を明らかにし、防除指導の参考に供する。

2 技術内容

(1) イネミズゾウムシの成虫は葉を、幼虫は根を食害し、幼虫の加害が激しい。本虫による被害は、水稻の初期生育、特に、分けつ抑制が主で、穂数及び籾数の減少を招き、減収となる。しかし、水稻の補償作用が働くので発生密度が低い場合は減収に至らない。放飼試験では、株当たり成虫密度0.6頭/株で5%、1頭/株で9%減収した(図1)

(2) 水稻移植後の初期生育を促進することにより被害を軽減できるが、発生の多い圃場では薬剤による防除が必要である。前年多発生地では、粒剤の育苗箱施用あるいは粒剤の水面施用を実施する。当年多発した場合は、粒剤の水面施用による防除を実施する(表1)。ただし、前年まで少発生に経過したところでは、防除が不要である。

表1 イネミズゾウムシの発生状況に応じた防除対策

発生状況	防 除 対 策		
	耕種的防除	薬 剤	に よ る 防 除
前年多発生 (前年6月上中旬の成虫密度0.3頭/株以上)	健苗育成 初期生育確保	a. 育苗箱施用	アドバンテージ粒剤あるいはオンコル粒剤 40~50g/箱 (移植直前)
		b. 水面施用	トレボン粒剤2kg/10aあるいはシクロサールU粒剤1.5kg/10a (5月下旬~6月上旬)
前年少発生 (前年6月上中旬の成虫密度0.3頭/株未満)	同 上	c. 一般には防除不要	—
		d. 水面施用 (当年6月上旬に0.3頭/株以上と多発した場合)	上記b.の薬剤の他バイジットサンサイド粒剤、パダンパッリ粒剤など4kg/10a (5月下旬~6月上旬)

* 表 2 参 照 の こ と

(3) 成虫の発生時期は日平均気温の10℃以上有効積算温度から予測でき、成虫の本田侵入始期は約80日度、侵入盛期170日度、最高密度到達期240日度の時期である(表2)。

表2 県内各地におけるイネミズゾウムシの平年発生時期

地点名 (積算温度)	侵入始期 (80日度)	侵入盛期* (170日度)	最高密度到達期 (240日度)
一ノ関 水沢 江刺 大船渡 千厩 北	5月16日	5月31日	6月9日
	5. 18	6. 2	6. 11
	5. 17	6. 1	6. 10
	5. 20	6. 5	6. 14
	5. 21	6. 5	6. 14
湯田 沢内 宮古 遠野	5. 27	6. 11	6. 16
	5. 30	6. 14	6. 24
	5. 25	6. 13	6. 23
	5. 26	6. 10	6. 20
岩泉 盛岡 好摩 雫石	5. 18	6. 3	6. 13
	5. 20	6. 4	6. 13
	5. 23	6. 7	6. 16
	5. 25	6. 8	6. 18
荒屋 葛巻 奥中 山	5. 27	6. 11	6. 20
	5. 31	6. 15	6. 24
	6. 4	6. 20	6. 29
二戸 軽米 久慈	5. 26	6. 12	6. 22
	5. 27	6. 13	6. 23
	5. 26	6. 13	6. 23

* 侵入始期5日後～侵入盛期を、水面施用による防除適期とする

3 指導上の留意事項

- (1) 成虫の発生時期(防除適期)は、病害虫発生予察情報を参考に、他2～3日おきに常発地を巡回して発生時期を把握し、防除適期を失しないよう注意する。
- (2) 薬剤の施用にあたっては、薬害、飛散等によるカイコへの事故がないよう十分注意する。

4 参考文献、資料……省略

5 試験成績の概要

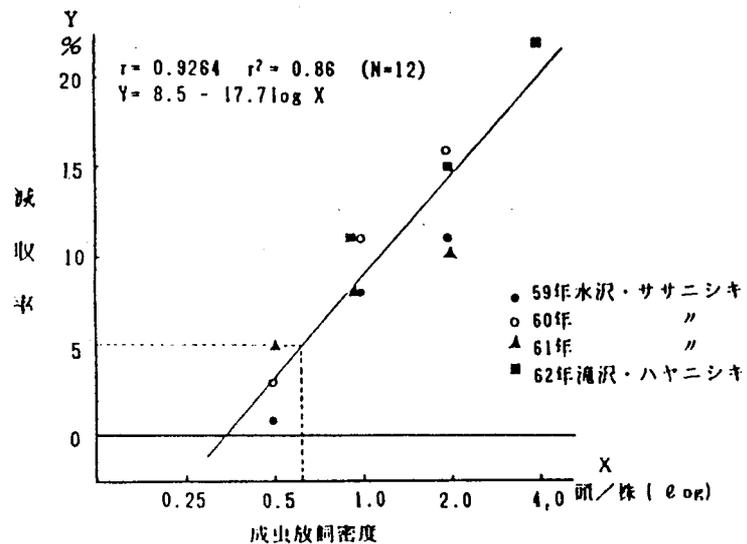


図1 イネミズゾウムシ放飼試験による水稲減収率

減収始 : 約 0.3頭/株
5%減収 : 約 0.6頭/株